

論 述

注 意

1. 問題は全部で6ページである。
2. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。
3. 解答はすべて解答用紙に縦書きで記入すること。
4. 解答用紙および下書き用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

次の文章を読んで以下の問に答えなさい。

問一 筆者は「仮面」と「ほんとうの顔」の関係をどのように考えていますか。第一段落から第三段落までの記述をもとに筆者の主張を五〇字以内で要約しなさい。解答用紙(その二)を使用

問二 傍線部①「わたしたちは、対立物を対立のまま、統一しなければならぬ」という部分を次のように言いかえる場合、空欄(1) (2) (3) (4) に当てはまる語句(各六字以内)を本文中から抜き出しなさい。解答用紙(その二)を使用

わたしたちは、(1) と (2) を対立させることなく、(3) でありながら、しかも(4) のものであるとする
ことによつて、自分の本当の相貌を見極めなければならない。

問三 この文章は第二次大戦の終戦後まもなく発表されたものですが、現在の日本人はどのような「仮面」を形成していると思うか、本文の内容を踏まえ、あなた自身の考えを八〇〇字以内で述べなさい。解答用紙(その二)を使用

世には、さまざまな仮面がある。あなたの顔にじっくり合うようにつくられ、ほとんどあなたに、みずからの存在を意識させないような、たいへん、かぶり心地のいい仮面もあれば、すこぶる不細工なしろもので、それをつけているあいだ中、絶えずあなたの頬をこわばらせ、死ぬほどあなたをいらいらさせるような仮面もある。あなたの顔の表情の一つをとつて、極度に誇張したり、歪曲した仮面もあれば、全然、あなたの顔とはかけはなれた、奇怪な表情をした仮面もある。神や悪魔の仮面もあれば、鳥やけもの仮面もある。

あなたは、つねに仮面をかぶる。したがつてあなたの恋人の愛しているのは、あなたの仮面かもしれないし、あなたの敵の憎んでいるのもまた、やはりあなたの仮面かもしれない。どうしてあなたは、ひと前で、好んで仮面をつけるのであろう。いや、単にひと前ばかりではない。ともすれば、あなたは、ひとりぼっちであるときでも、しばしば、仮面をはずすのを忘れてしまうようである。それは、あなたが、きびしく表情の限定された、はっきりした輪郭をもった仮面をかぶることによつて、あなたの絶えず動揺

する顔を、——ささやかな刺激にもすぐ反応を示し、たちまち表情を変えてしまう、あなたの敏感な顔を、人眼にふれさせたくないと思つてゐるためであらうか。それともあなたの顔の特徴を際立たせることによつて、人眼をひこうと試みてゐるためであらうか。あるいはまた、あなた自身の顔に飽きあきして、あなた以外のものの顔をもちたいと望んでゐるためであらうか。いずれにせよわたしは、あなたのほんとうの顔を、みたことがない。

いつもなにかをせせら笑つてゐるような、凶々しい、不敵な顔の背後に、内気で、小さな、弱々しい顔の隠れてゐることもあれば、始終、生きがいを感じてゐるような、希望にみちた、快活な顔の内部に、幻滅に悩んでゐる、いたましい、あわれな顔の潜んでゐることもある。どちらが、ほんとうの顔で、どちらが仮面なのであらう。むろん、見なれた顔が仮面であり、その仮面の落ちた瞬間、あらわれてくる顔のほうが、ほんとうの顔であるなら問題は無いが、あるいはその新しい顔もまた、たいして変りばえない、新しい仮面であるかもしれないのだ。もう一つ仮面を！ 第二の仮面を！ ニーチェ風にいふならば、人間の顔は、一切仮面であり、わたしたちは着物をきたり、ぬいだりするように、次々に、仮面をつけたり、はずしたりして、生きつづけており、したがつて、もしもわたしが、あなたのほんとうの顔をとらえようと考えらば、嫌でもわたしは、あなたの仮面を手がかりにするほかはない。実証主義者が仮説を嫌悪するように、モラリストは仮面から眼をそむける。しかし、仮説が、科学的発見のための不可欠の前提であるように、仮面が、わたしに、あなたのほんとうの顔を発見させないとはかぎらない。思うに、あなたが、仮面を一刻も手ばなそうとしないのは、あなたもまた、わたしと同様、あなたのほんとうの顔を知らず、仮面を駆使することによつて、あなた自身の顔のいかなるものであるかを、ひたすら探求してゐるためではあるまいか。ドン・ファンにしろ、タルチュッフにしろ、みごと、仮面をかぶせて、人眼をあざむいてゐるつもりでいながら、実は、一步、一步、おのれのほんとうの顔を模索してゐたのではなからうか。

しかし、あなたの仮面から、——いや、一般的に日本人の仮面から、ほんとうの顔をみちびき出すのは困難である。たとえば能面というものがある。仮面が、ほんとうの顔への手がかりをあたえるのは、それが、いささかもほんとうの顔に似ていないばかりでも、丁度、分子が玉突き将球として、エーテルがジェリーとして、さらにまた、力が弾性のある管として表現されるように、

きわめて単純化された、はつきりした表情をもっており、それをたよりに、ほんとうの顔をあきらかにすることができるところからである。しかし、そういう明瞭な表情は、能面からはきれいに拭い去られている。能面には表情がない。いわば、完全犯罪の行われた現場のように、まるで手がかりというものが無いのである。いかにわたしが、ゆたかな推理力をめぐまれているにせよ、このような仮面から、わたしやあなたの顔を、——わたしたち日本人のほんとうの顔を探り出すことは、まったく不可能にちがいない。むろん、仮面をとりあげた以上、わたしたちの祖先にも、おのれのほんとうの顔をみきわめたいという意志が、すこしもなかったとはいえないが、——しかし、それならばどうしてかれらは、よりによって、能面などという不埒な仮面を、苦勞して発明したのであろう。そこには、まるでおのれのほんとうの顔を、いつまでもみきわめたくはないという反対の意志が、同時に、はげしく働いているかのようなのである。もつとも、こういうと、いまだにわたしたちの周囲にたくさんいる能面の愛好者たちは、能面の無表情は、ただの無表情ではなく、それは、すべての表情を殺すことによって、すべての表情を生かす、象徴の極致にほかならず、たいの仮面の表情が外にむかって強調されているのに反し、能面においては、あらゆる表情が、内にむかつておしつつまれており、したがって、それは、おのれのほんとうの顔を、内がわからとらえようとする、たくましい意志によって支えられているのだ、と、能面とは似ても似つかぬ不機嫌な表情をしながら、わたしにむかつて抗議するかもしれない。しかし、はたしてわたしたちの本当の顔は、みずからの内部をのぞきこむことによつてあきらかになるであろうか。むしろ、それは、わたしたちが、おのれ以外のものに変貌しようと努め、おのれ以外のものでありながら、しかもおのれ自身でありつづけることによつて、——つまるところ、確固とした表情をもつ仮面をかぶることによつて、かえつて、はつきりするのではなからうか。思い切つて大げさな表情をした仮面なら、なんでもいい。わたしは、あなたが、たとえ滑稽にみえようと、グロテスクにみえようと、曖昧な表情をした仮面などでない、固定した顔つきの仮面をかぶりつづけられることに、まったく賛成である。

能面は、正直なところ、わたしに、外界との接触を失い、自分だけの世界に閉じこもつて、とりとめのない空想にふけつていく、精神分裂病者の無表情な顔を思わせる。能面をつけた人物がしばしば、舞台の上で、面白う狂い候え！と要求されるところをみると、これは、まんざら、わたしの独断とばかりはいえないらしい。したがって、能面の背後に、するどい探求精神の隠れてい

ようはずもなく、無表情なドアの背後にみいだされるものは、塵埃と蜘蛛の巣、荒れ果てた部屋のなかのつめたい沈黙だけかもしれない。さきにもふれたように、おそらくは意志のアンビヴァレンツ（二面性）のため、——おのれのほんとうの顔をみきわめようという意志と、みきわめたくないという意志とが、同時に存在したため、仮面の背後に、このような荒唐がもたらされたのであるが、——しかし、事のおこりは、むろん、人びとが、あやしげな仮面に、ふと、心をひかれたためにほかならなかった。思えば、こういう仮面の犠牲者は、わたしたちの身边には意外に多く、たとえば、戦後の実存主義者のなかなどにも、無数に発見されるにちがいないが、そのあまりに空想的な点において、ことさらに西洋的なものに対立し、もっぱら日本的なものなかに閉じこもろうとした点において、そうして、わたしたちのほんとうの顔を、どこまでも内がわからとらえようとして失敗した点において、最も典型的な精神分裂症状を示したのは、戦争中の日本主義者であった。わたしは、特別に、かれらの知性が貧困をきわめていたとは考えない。要するにかれらは、仮面の選択をあやまつたのだ。どうしてかれらは、しらじらしい顔つきをした能面などに魅力を感じたのであろう。この世には、呪われた宝石というものが存在するように、呪われた仮面というものもまた、存在する。そうして、この不吉な仮面をかぶるや否や、突然、人びとは発狂状態におちいり、ふたたび收拾のつかぬほど、かれらの精神を、ずたずたに引き裂かれてしまうのである。仮面の呪いをうけた日本主義者が、支離滅裂な文句を、息もつかずに、しゃべりつづけていたことに不思議はない。

もはやわたしたちは、わたしたちのほんとうの顔をあきらかにするために、能面のような呪われた仮面を手がかりにすべきではなかった。わたしたちは、もつとはつきりとした、するどく類型化された表情をもつ仮面を、さつそく、どこからかみつけ出すべきであった。むろん、日本には、能面のほかに、いろいろな仮面があり、そのなかには、あざやかに表情の強調されている仮面もないではない。たとえば、伎楽面の深刺とした表情は、つねに能面の無表情と比較される。しかし、いま、わたしが、そのような仮面をとりあげること若干の危懼をいだくのは、はたして日本の仮面から、日本人の本当の顔をみちびき出すことができるであろうか、という疑問が、いつもわたしの胸のなかで、もやもやとくすぶりつづけているからである。日本主義者は、西洋的なものと日本的なものとを対立させ、日本的なものの典型である能面をとりあげることによって錯乱したが、たとえば、大袈裟な表情を

しているとはいへ、伎楽面もまた、たしかに日本的なものの一つであり、あるいは、能面と同様、それもまた呪われた仮面の一つであるかもしれないのだ。仮面の選択にあたっては、どんなに慎重であつても、ありすぎることにはない。案外、日本の仮面よりも西洋の仮面のほうが——たとえば、あの大きく漏斗のようにひらいた口をもつ、ギリシャの喜劇用の仮面などのほうが、かえつて、適しているのではなからうか。なるほど、西洋の仮面から、日本人のほんとうの顔をみちびき出すことなど、一見、できない相談のようにみえないこともない。しかし、繰返して述べるまでもなく、わたしたちのほんとうの顔は、わたしたちが、おのれ以外のものに変貌しようと努め、おのれ以外のものでありながら、しかもおのれ自身でありつづけることによつて、むしろ、はつきりするはずであつた。そのための仮面である。したがつて、日本の仮面よりも、西洋のそのほうが、はるかにわたしたちの目的になつているともいえるのだ。しかし、そのなかで、ギリシャの仮面が、いちばん、いいかどうか、にわかに判定をくだしがたい。

いかにもAは、Aであると同時に非Aであり、これが現実の弁証法的な発展過程をあらわすものであることはいうまでもあるまいが、——しかし、多くの人びとは、この公式を使つて、ただ現実を客体としてとらえ、いろいろと解釈するにすぎず、Aが、Aであると同時に非Aでもあらうとするときの困難を、——現実を主体的にとらえる場合にうまれる、さまざまな障^{しょうがい}碍を、いっこう身にしみて感じてはいないような気がする。たとえば、日本的なものは、日本的なものであると同時に西洋的なものであり、そうして、それが日本的なものもつ客観的現実であることに疑問の余地はないが、——しかし、はたしてわたしたち日本人は、この客観的現実を、どの程度に主観的にとらえていることであらう。もしもわたしたちが、おのれ自身でありながら、しかもおのれ以外のものであらうとするなら、なによりもまず西洋的なものを血肉化しなければならぬことはいうまでもないが、たとえそういうはげしい意欲をいだくにせよ、ほとんどわたしたちの大部分は、せいぜい、和洋折衷の範囲にとどまつて妥協しており、——したがつてまた、いかにそれが難事中の難事に属するかということについても、かくべつ、はつきりした自覚をもっている模様もない。いやそれどころか、戦争中、問題が、つねに、Aか非Aか、——日本的なものをえらぶか、西洋的なものをえらぶか、という二者択一の形で提起されはじめるとともに、たちまち西洋的なものの探求を中止し、あわてて例の呪われた仮面をかぶつた

ひともある。レヴィット（カール・レヴィット、ドイツの哲学者）は、こういうわたしたちの西洋的なものにたいする不徹底な態度を、西洋から学び、西洋から受けついだ進歩を、西洋に反抗するための手段に使用しようというのだから、君たちの西洋的なものにたいする関係が、すべて自己分裂的になり、アンビヴァレンツになるのは当然のことだ、と、いかにも先生らしく批評したが、——しかし、これは、必ずしもわたしたちが、生来、手のつけようもない不良な生徒であるからではなく、やはり、わたしたちに、適当な仮面がないためではあるまいか。それゆえにこそわたしたちは、西洋的なものにたいして認識不足であり、——したがって、また、わたしたちのほんとうの顔が、いつまでもわからないのではなからうか。

もはやわたしたちは、いつまでも既成の仮面にこうでいなぞ拘泥せず、わたしたちのほんとうの顔をあきらかにすることのできる仮面を、わたしたちみずからの手で、つくり出すべきであつた。戦争中、日本主義者の繰返していたように、もしも日本的なものと西洋的なものとが、完全に対立するものなら、日本的なものの姿は、日本的なものが、西洋的なものと断絶し、おのれのなかに閉じこめることによつてではなく、かえつて、正反対な極点に、——西洋的なものの立場に立つことによつて、はじめてあざやかに浮かびあがつてくるであろうが、——しかし、それは、もちろん日本的なものが、西洋的なもののなかにあつて、おのれを失うことではなく、おのれ以外のものでありながら、しかもおのれ自身でありつづけるということであつた。そこにわたしたちの仮面の独自の性格がある。

わたしたちのほんとうの顔は、日本的なものと西洋的なものとの両極間に支えられてつくられた球面の上にあり、そこには、ほとんどまだ誰からも探求されたことのない暗黒地帯が茫々とひろがつており、——それゆえ、その未知の領域を避けてとおりさえすれば、わたしたちの両極間の往復運動は容易であり、妥協も折衷も許されようが、——しかし、それでは永久にわたしたちのほんとうの顔はわからない。^①わたしたちは、対立物を対立のまま、統一しなければならぬ。そうして、その統一の方法が、同時にまた、仮面形成の方法でもあるのだ。

（花田清輝『アヴァンギャルド芸術』より）

